

四国東部の地震活動-'02-'04の結果一

○許斐直・近藤和男・松村一男

1.はじめに

南海地震直後半年間の地震発生状況を調べた宇津(1957)によると震源から和歌山県あるいは紀伊水道とその南の海域(室戸舟状海盆)の広い範囲での活発な余震活動とともに四国東部に多くの地震が発生している。市川(1965)が四国東部で南海地震の前後で起震応力が南北から東西に変わったと指摘した事は現在の知識では大地震前のマントル内での活動と上記の浅発余震活動の交代による見かけ上のものと理解されている。又Okano and Kimura(1979)は四国中部と東部の地殻内地震の分布に見られる差異に触れ、前者が安政の南海地震の余震活動の名残りであると考えた。四国全域の地震活動を長期にわたって追跡して来た木村(1998)は地殻内地震は1968年から1997年の間次第に減少し又マントル地震の減少傾向は鈍いとしている。

2.今回取り扱うデータ

1999年10月末の川之江沖のM4.9の地震の他2001年2月の勝浦町付近のM4.4まで四国東部の浅発地震の活動は高いレベルにあり芸予地震の発生もあって注目された。(許斐ら,2001;山科,2001)

図は2002から2004年まで徳島観測所で決めた震源である。2002年4月より2004年3月までは『西南日本』の事業に沿った処理がなされたので、小さな地震は漏れが多い。従って気象庁の結果を参照しながら検討を行なう。

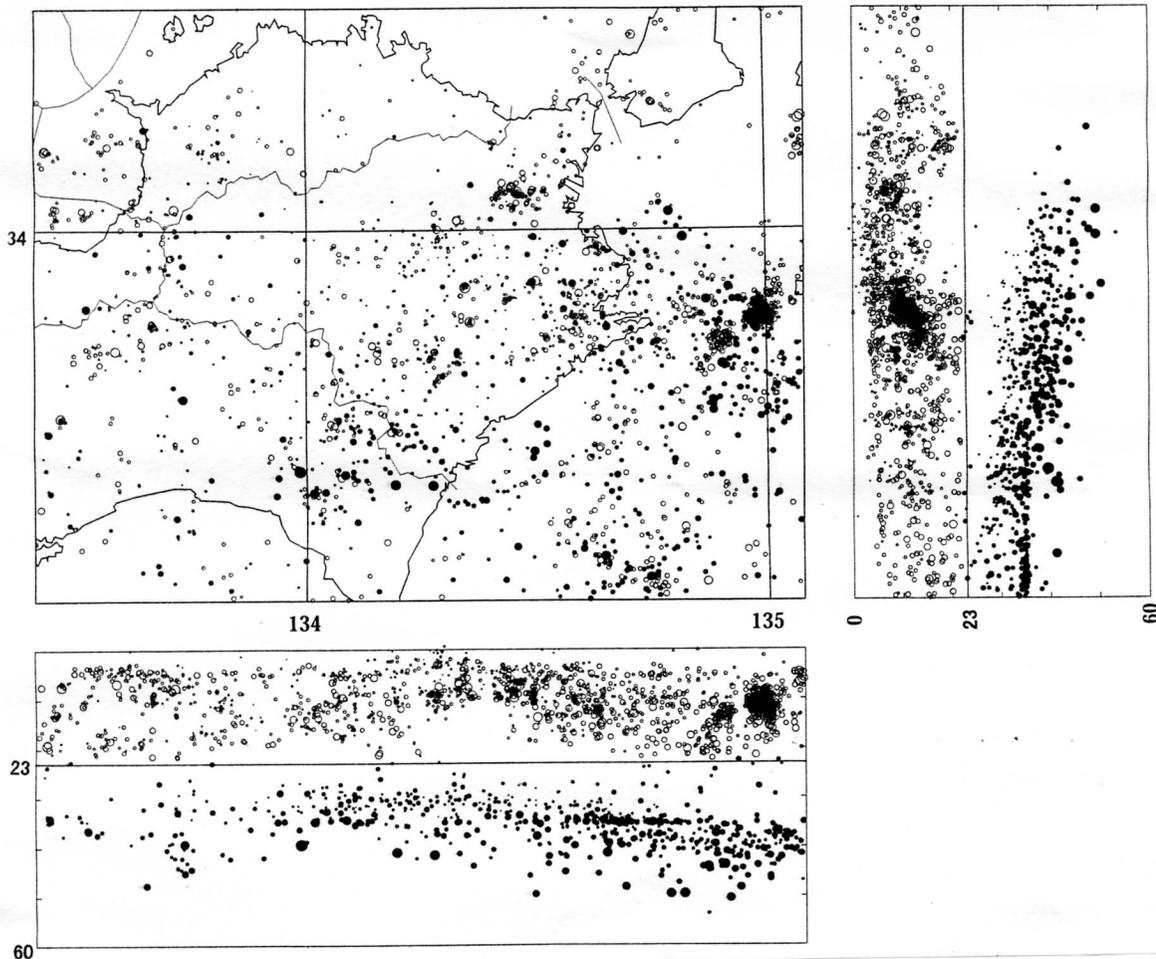


図1. 震源の分布 (2002~2004, ○<H23Km, ●>H23Km)